

2026年1月4日 新年礼拝(降誕節第2主日礼拝)メッセージ
「作られた伝統」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 2章 41-52節

あけましておめでとうございます。この年末年始、気温は寒くなったものの、天候は良かったので、あちこちで初詣に行かれている方々の姿を見かけましたし、また大きな神社の近くの道路では、今年も、車が渋滞していました。お正月になると、家族みんなで初詣に行く人が多いというのも、いわゆる風物詩、季節的な行事なのだろうと思います。大きな神社の周りには、出店も沢山出ていますし、多くの人が参拝のために往来、行き来していますから、小さい子ども連れの方などは、子どもが迷子にならないようにヒヤヒヤしているのではないかと想像します。日本の教会は、神社やお寺のように広大な敷地を有している所は少ないでしょうから、そのような状況は少ないかと思いますが、海外にある世界的にも有名な大聖堂などになると、一大観光地として世界中から観光客や参拝客が集まるでしょうから、似たような状況かもしれません。

さて、そのようなことを考えながら、今回の聖書のお話を眺めてみると、なるほど今から2000年前の古代イスラエルでも、少年のイエス様も、現代の私たちが心配しているのと同じように、両親と共にエルサレムの神殿に参拝に行った帰りに迷子になったのか、ということが書かれています。イエス様の両親であるマリアとヨセフは、イエス様を連れて、毎年、過ぎ越しの祭りの際にはエルサレムの神殿に行っていたとあります。何故なら、律法によって、そのように定められていたからです(出エジプト記 23:17、34:23、申命記 16:16)。

イエス様たちが暮らしていたナザレの村から、神殿のあったエルサレムの町までの距離は、片道でおよそ100キロほどありましたから、大人の足でも3日間ほどだったでしょう。途中で寝泊まりすることも必要ですし、家族だけで行ったのではなく、親類や知人たち一行と道連れて行ったとありますから、恐らく村の中から巡礼団のような形で、何十人の大勢のメンバーと一緒に行ったのかもしれません。だからこそ、マリアとヨセフはイエス様の姿が見えなくとも、「きっとどこかにいるだろう」と思っていた。それこそ母親の方は「父親と一緒にいる」と思い込んでいて、父親の方は「母親と一緒にいる」と思い込んでいて、実はどちらとも一緒にいなかった、というのは、さもありそうです。

両親は、そのまま一日分の道のりを行ってしまった後で、一行の中を捲し回った

けれども見つからなかつたので、搜しながらエルサレムへ引き返したとあります。ですから、1日分行つては、1日分引き返して、ようやく3日目になってからイエス様が神殿の境内で、何人の教師たち（律法学者たち）の真ん中に座つて、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけました（ルカ2:46）。そして、イエス様をようやく発見したマリアは言いました。「なぜ、こんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんも私も心配して搜していたのです」（48）。しかし、イエス様は「どうして私を捜したのですか。私が自分の父の家にいるのは当然でしょう」（49）と答え、両親はこのイエス様の言葉の意味が分からなかつた（50）ものの、マリアはこれらのことのみを心に留めていた（51）と、記されています。

このお話は、少年時代のイエス様の様子を描いた物語として、「ルカによる福音書」だけに記されています。両親はイエス様を「自分の子ども」として育てていたけれども、イエス様は12歳の頃から自分が「神の子」「天の父の子」としての自覚があり、「天の父の家」である神殿こそが自分のいるべき場所であるということを象徴的に示していた。しかし、両親はそれを理解できなかつた。理解できないけれども、出来ないままでマリアは「それらをすべて心に留めていた」（51）というこのお話は、要するに、「さすがはイエス様」というお話です。ですが、本当にそれが聖書の伝える福音なのでしょうか。私はどうも違うのではないかと感じています。

今日は初めに、お正月の風物詩である「初詣」についての話をしました。私自身、そのような光景を見るのは、幼い頃から毎年のことでしたので、それが当たり前であり、それこそ日本の「伝統」だとばかり思っていましたが、先日「初詣は明治時代になってから、各地に鉄道が広まってから、鉄道会社が集客のために打ち出したキャンペーンとして始まったものであり、たかだか150年ほど前に作られた慣習に過ぎない」ということを知りました。考えてみれば、移動の手段がないわけですから、毎年毎年、お正月の度に大勢の人が長距離を移動して、遠方の神社にお参りに行けるはずがありません。江戸時代に流行したと言われている伊勢神宮への「お伊勢参り」だって庶民にとっては一生に一度の大旅行だったでしょうし、それも当時の人々によって喧伝されたキャンペーンとして始まったのではないかと思ひます。

福音書に記されているような毎年のエルサレムへの巡礼、神殿参りについても、それが実際にあったのかというと、歴史的には恐らくは無かつただろうと考えられています。律法には「年に3回の神殿詣でを守りなさい」と定められていても、實際にはそんなことが出来る人は一部の限られた人たちだけで、大半の庶民たちに

はそんなことは出来なかった。ましてやナザレという田舎の貧しい村から、片道3日、往復5日もかけて、毎年何十人もの巡礼団がやって来るなんてことは、到底不可能なことだったでしょう。

ナザレの人として、歴史の中を生き、そして十字架刑で殺されていったイエス様と出会った人々、その後の教会の人々が、イエス様のことを様々に語り継ぎ、物語として書き記していく中で、このような少年時代のイエス様のお話が作られていきました。「あんなにすごい人だったから、少年時代からきっとすごかったに違いない」ということで、「少年時代から神童でした」として描かれるというのは、聖書だけに限らず、古代の偉人たちの伝説にはよくあることです。また両親が見失っていたイエス様を「三日目に発見した」というのも、歴史的事実というよりは、イエス様の十字架での処刑から3日目の復活、死からの引き起こしという後の出来事を知っている人たちだったからこそ、なぞらえて記すことが出来たものだと考えることができます。

このような福音書を執筆し、まとめ編纂したルカは、この12歳時点のお話の前にも、誕生後の赤ちゃんの時にもイエス様が神殿で献げられたという記事も記しています(2:22-39)。それは、実際にその出来事があったかどうか、ということよりも、そのような律法で定められた手続きが踏まれていた、それらを大切にする家に育てられ大きくなつたということを示すことで、イエス様が特別だったこと、神の子としての正当性を示すためだったのだろうと考えられます。しかし、そのように律法上の正当性を描いた為に、却って「父親不詳の子」という律法を外れた出自を持っているということが強調されるという前後の文脈になっています。

さて、それでは、これらの作られた伝統、創作された物語が、私たちに伝えていることは何でしょうか。私は49節のイエス様の言葉「私は自分の父の家にいて当然だ」よりも、むしろ最後の52節「イエスは神と人から恵みを受けて、知恵が増し、背丈も伸びていった」に注目したいと思います。52節は、この新しい聖書協会共同訳では正しく訳されていますが、以前の新共同訳では「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された」と訳されていました。あたかも「12歳にして律法学者たちと対等に議論できる程の神童イエス様であるから、その後もますます賢くなり、大きくなり、そして神様と周りの人々からも特別に大切にされた」ということを、強調しているようです。ですが、イエス様だから特別に神と人から寵愛を受けたわけではなく、「神と人から恵みを受けたから」こそ、その後も成長していくことが出来た、ということであり、それは何もイエス様だけに限らず、私たち全ての人

がみんなが、生き、生活し、そして成長していくの全て、「神と人から恵みを受けたから」こそのことなのだろうと思います。

クリスマスに、出産間際の妊婦であったにもかかわらず、マリアとヨセフは宿の中に入れてもらうことが出来ず、家畜小屋で初めての出産を経験しました。その状況を現代にたとえて、「イエス様はクリスマスに、ホテルの中に入れてももらうことが出来ずに、ホテルの外の駐車場で生まれた」と語られたクリスマスのメッセージがありました。当時の馬やロバという家畜は、現代で言うと車やトラクターですから、その家畜小屋を駐車場と言い換えたのは上手で、「なるほど」と思いました。「動物たちの家畜小屋」と聞くと、それこそ「作られた伝統」で、紙芝居や絵本、絵画やステンドグラスなどにこれまでたくさん描かれて来たように、勝手に温かい場所を想像してしまいがちですが、「駐車場」と言うとどうでしょうか。そこにあるのは、固いコンクリートと冷たい鉄の塊だけではないでしょうか。

「現代社会の中で、イエス様はどこに生まれたのか」……、そのことを考えると、それこそ妊娠を誰にも相談することが出来ず、日に日に大きくなってくるお腹に不安を覚えながら、孤独の内に出産し、その新生児を置いていかざるを得ないような方の所にこそ、イエス様は来られたのではないかと思います。固く、冷たく、孤独と悲しみに打ちひしがれ、神から人も見放されたようにしか感じられないような、絶望的な、そのような中にあっても、それでも、そこもまた紛れもない神の家、神の働く場、神が共にいます場所である、ということ……。そのような中にあっても尚、隣にいてくれる人、声をかけてくれる人、手を差し伸べてくれる人たちがいる……。だからこそ、私たちは今日も生きることができます。「主の祈り」で「今日の糧を与えたまえ(必要な糧を今日与えたまえ)」(マタイ 6:11)と祈るように、今日一日を生きることが出来るのも、神と人とによって支えられたから。それこそ「お陰様」であるからこそ、私たちは今日も生かされているということではないでしょうか。

「作られた伝統」と、その「背後にある真実」。それはいわゆる「陰謀論」のように、隠されていて、ごく一部の人だけしか知らないことではなく、また「イエス様だから幼少期から天才だった」というようなごく一部の人だけを特別扱いすることでもなく、全ての命はかけがえのない大切な命であり、神が紛れもなく共におられて働かれていること、だからこそ生かされているということではないでしょうか。そのために神は最も小さくされた姿で、最も低い所に生まれたのだと思います。そのような神と共にあって、また周りの人々との間にあって、私たちは今日も恵みを頂きながら、生かされて参ります。